

# vivo

水戸芸術館音楽紙[ ヴィーヴォ ]

5 MAY 2004

## CONTENTS

ナタリー・シュトゥッツマン	
コントラルト・リサイタル	.....1, 2
「茨城の名手・名歌手たち 第15回」	
出演者オーディション	.....2
音楽物語 ぞうのババール	.....3
最近の公演から	.....4
ネタマ&petite情報	.....5
インフォメーション	.....6



Babar and the distinctive likeness are trademarks of Laurent de Brunhoff and are used with his permission. Copyright © Laurent de Brunhoff All Rights reserved.

写真上;左からナタリー・シュトゥッツマン、インゲル・ゼーデルグレン  
下;『ぞうのババール』から

## 歌姫、水戸の春を彩る。[ 第2弾 ]

5 / 22(土) ナタリー・シュトゥッツマン コントラルト・リサイタル

3月21日のクリスティーネ・シェーファー(ソプラノ)に続き、5月22日には現代を代表するコントラルト歌手ナタリー・シュトゥッツマンが登場し、水戸の春を彩ります。注目のプログラムは、シュベルトの歌曲集 冬の旅 全曲。幾多の男性歌手たちによって歌い尽くされた名作が、シュトゥッツマンの深々としたコントラルトの響きを纏ってどう生まれ変わるのか、期待が高まります。

現代最高の歌手の1人 ナタリー・シュトゥッツマン  
バーバラ・ボニー(2002年10月に登場)、アンネ・ソフィー・フォン・オッター(2003年4月)、フィオレンツァ・コッソット(2003年8月)、クリスティーネ・シェーファー(今年3月)と続いた水戸芸術館の女性歌手リサイタルのシリーズも、今回のナタリー・シュトゥッツマンで一区切りとなります。

フランス生まれのシュトゥッツマンは、活動の重きをオペラよりも、インゲル・ゼーデルグレンのピアノ伴奏によるリートに置いている歌手です。ショソン、ドビュッシー、プーランクなど母国フランスの歌曲はもちろん、不世出のバス歌手ハンス・ホッターに学んだドイツ・リートも、ドイツ人顔負けの美しい発音と知的な解釈で私たちを魅了してくれます(その名の示すとおり、彼女がドイツ系フランス人であることもそれと無関係ではないでしょう)。

また、シュトゥッツマンは、20世紀後半に活躍した偉大なバリトン歌手ディートリヒ・フィッシャー＝ディースカウがステージを降りたその穴を埋める選

材として注目された歌手でもあり、全5枚の「シューマン歌曲集」、「ブラームス歌曲集」など50枚に及ぶレコーディングを発表しています。そのどれもが、知性と品格を備えた質の高い作品となっているのは驚きです。

シュトゥッツマンは、音楽界をリードする世界的指揮者たちからも熱いラブコールを受け続けています。まず、何と云っても、我々がマエストロ小澤征爾がシュトゥッツマンの実力を高く評価しています。シュトゥッツマンは、1997年のJ.S.バッハ マタイ受難曲、2000年のマラー 復活 といったサイトウ・キネン・フェスティバルの目玉プロジェクトに招かれ、公演に美しい花を添えました。また、ピエール・ブーレーズ、サイモン・ラトル、マイケル・ティルソン・トーマス、ヴォルフガング・サヴァリッシュ等、現代の名匠から絶えず出演依頼を受けつづけているほか、ジョン・エリオット・ガーディナー、ウィリアム・クリスティ、マーク・ミンコフスキ等、古楽の指揮者たちからの信頼が厚いのもシュトゥッツマンの特徴といえるでしょう。

水戸室内管弦楽団との共演

シュトゥッツマンは、過去2回、水戸室内管弦楽団の共演者として、コンサートホールATMの舞台に立っています。

1回目は1997年6月の第30回定期演奏会(指揮:若杉弘)。ラヴェルの歌曲集 博物誌 を歌い、ユーモアと風刺を变幻自在に織り込んだ巧みな歌

唱で聴衆を魅了しました。アンコールで聴かせた オンブラ・マイフ での透明感のある歌声と絶妙なニュアンスも、忘れがたい印象を残しました。

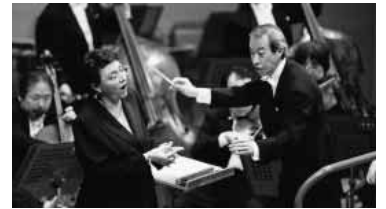
2回目は2002年11月の第52回定期演奏会(指揮:若杉弘)。ヴァーグナーの ヴェーゼンドンク 歌曲集 を歌い、オーケストラの美しい響きに乗って、官能的な愛の世界を表現しつくしました。ドイツ語の歌詞の一語一語に込めるニュアンスの多彩さに、指揮者の若杉氏をはじめ、多くの楽団員たちが感嘆していたのを思い出します。

こうした共演の成果から、「今度はぜひ彼女のリサイタルを!」というお客様からの声をたくさん頂戴していたのは言うまでもありません。名ピアニスト、インゲル・ゼーデルグレンの伴奏によるリサイタルでは、シュトゥッツマンならではの世界がより濃密に表現されることでしょう。

コントラルトの声

シュトゥッツマンの個性を語るとき、まず挙げなくてはならないのは、あの独特の声です。力強く、豊麗で、艶やかで、品があり、また奥行きもある深々とした声。「高い声は練習すればいくらでも出るようになるが、低い声は持って生まれたものにはかなわない」と言われますが、シュトゥッツマンの低い声はまさに天からの授かりものと言えるでしょう。

女性の声を音域的に分類すると、高いほうから順に、ソプラノ、メゾ・ソプラノ、アルトの3つに分



水戸室内管弦楽団第52回定期演奏会より

けるのが一般的です。シュトゥツマンは、その音域からすると「アルト」に分類されるはずですが、あえて自身で「コントラルト」としています。何故なのでしょう。

現代では、アルトもコントラルトも同義で使われることがほとんどです。コントラルトだからといって、アルトよりも高い声あるいは低い声が出るわけではありません。そもそも、上記3つの分類でも音域が正確に区分されてはいないのです(マリア・カラスやチェーリア・バルトリといった歌手の声種を見ると、それぞれソプラノとなっていたり、メゾ・ソプラノとなっていたり、表記が一定でないのは、読者の皆様もご存知かもしれません)。ですから、現代では、アルトもコントラルトも同じ意味だが、アルトのほうが圧倒的に多く使われていて、コントラルトという表記はあまり見かけない、というのが一般的なところでしょう。

しかし、言葉の本来の意味を調べてみると、両者には違いが出てきます。アルトは、「テノールの上に位置する声部」という意味です。一方、コントラルトは、「ファルセット歌手やカストラート歌手といった男性歌手」を意味するところから始まり、ついでそれらの歌手たちが担当する声部をも意味するようになったと考えられます。

シュトゥツマンが自らの声種を「コントラルト」としてこだわるのには、こうした言葉の本来の意味が大きく影響している可能性があります。シュトゥツマンの声は、クリスタ・ルートヴィヒやアグネス・バルツァといった女性アルト歌手たちの丸みを帯びたふくよかな声よりは、ルネ・ヤコブスやジェラルド・レーヌといった男性カウンターテナーたちのクリアで力強い声により近いと感じられます。

シュトゥツマンは、ひょっとしたら、現代のカストラートだろうとしているのかも知れません。

性差を超越した 冬の旅

今回のリサイタルの最大の聴きどころは、幾多の歌手たちによって歌われてきたシューベルトの名作 冬の旅 が、コントラルトによって歌われるということでしょう。

冬の旅 のような作品は、連作歌曲集と呼ばれ、その歌曲集の中で、あるストーリーが完結するように作られています。冬の旅 (1827年)より前に作曲された 美しき水車小屋の娘 (1823年)は、まさにそれを絵に描いたような作品です。さすらいの旅に出た若者が、水車小屋の娘に恋し、その恋は成就する。しかし狩人の出現により娘の心は移り、若者は失意に暮れ、小川に安らかな憩いの場を見つける。この歌曲集の中には、旅立ちを前にわくわくするような気持ちや恋の喜び、愛が成就したことへの安堵感、ライバルが出現したときの不安、恋人に裏切られた怒りや失意など、若者の恋にまつわる感情のありとあらゆる局面が刻印されているといっても、あながち言い過ぎとは思えません。

一方、冬の旅 ではどうでしょうか。水車小屋とおなじく、旅立ちの歌から始まりますが、冬の旅 にははじめてから夢も希望もありません。愛が終わったところから、物語がスタートしています。水車小屋 の1曲目 さすらい では、あんなに快活に浮き足立っていたリズムが、冬の旅 の1曲目 おやすみ では、絶望に暮れ、とぼと歩を進める姿を連想させる単調なリズムに取って代わられます。そのさすらいの旅で主人公が見

るものは、恋人の嘲笑を思い起こさせる風見、雪と氷に閉ざされた野原、なつかしい過去を思い出させる菩提樹、鬼火の戯れ、自分の髪を白くしたと錯覚させる冷たい霜、自分を餌食にしようとするカラス、吹きすさぶ嵐、まぼろしの太陽……。最後に会おう、村の道端で黙々とライアーを弾き続ける年老いた辻音楽師の孤独な姿の中に、ようやく主人公は憩いの場を見出して終わります。その音楽は、全24曲を通して異様なほどに暗く、ある線を越えてしまったかのような幽玄さを醸し出しています。

水車小屋 に比べ物語性が弱く、逆に抽象性が高いので、SP時代のロッチ・レーマン以降、クリスタ・ルートヴィヒ、ブリギッテ・ファスベンダー、白井光子、クリスティーネ・シェファーなど、この歌曲集に取り組み女性歌手たちも少なくありません。これらの歌手に共通するコンセプトとして、「女性の立場から作品と接しても、主人公を女性と捉えても、作品の意図するところは変わらない」という考え方があるように思われます。

今回、コントラルトのシュトゥツマンが歌うことにより、冬の旅 の演奏史にさらに大きな視座が与えられるかもしれません。先述のように、シュトゥツマンが「コントラルト」に男声的な意味も含めているのだとすれば、男性的なものも女性的なものも両方を兼ね備えたシュトゥツマンのカストラートの歌声は、性差を超えた普遍的な主人公の心理を描き出すことになるからです。

このリサイタルは、ちょっと聴き逃せません。

《関根》

## 名手たちの真剣勝負!!

5 / 29(土)「茨城の名手・名歌手たち 第15回」出演者オーディション

茨城県に関わりのある優れた音楽家を広く紹介する演奏会「茨城の名手・名歌手たち」。15回目を迎える10月23日[土]開催予定の演奏会に先立ち、5月29日[土]に出演者オーディションを行います。今回の対象は、鍵盤楽器、弦楽器、邦楽器(以上、いずれもソロ)、および邦楽アンサンブル(2~5人まで)の各部門(管楽器、打楽器、声楽、器楽アンサンブル各部門は、来年の対象となります)。

「茨城の名手・名歌手たち」は、茨城県内の若

手音楽家の登竜門として広く知られており、今現在、国内外の大舞台で活躍する音楽家もここから巣立っています。また、合格者の方には、水戸芸術館の他の様々な企画にご出演いただいてもいます。

オーディションは、茨城県に関わりのある方ならどなたでも参加できます(応募受付期間は4月30日[金]迄)。毎年、たくさんの方々がオーディションに参加し、演奏会出演に向けて力強い演奏が繰り広げられます。高まった緊張感の中から生

れた音楽を聴く審査委員の先生方も、審査会議では熱く意見を交わされ、双方ともに真剣勝負の日ともいえましょう。隔年開催となって、待ちに待った方、今年は挑戦してみようと思われた方などが集まり、応募数も増えています。受験者の皆さんはさらに腕に磨きをかけて臨まれることでしょう。オーディションは一般公開されます(入場無料。詳細はお問い合わせください)。白熱したステージを見に、聴きに、応援しにいらっやいませんか。

《馬場》



写真左から；  
高橋アキ、長野羊奈子

## あのババールが、7年の時を経て帰ってくる。 5 / 5 (水・祝) 音楽物語《ぞうのババール》

### ブリュノフのババール、プーランクのババール

上のような見出しを掲げてはみたものの、ババール君が芸術館に帰ってくるのはあんまり久しぶりなので、彼のことをご存じない方もいらっしゃるかもしれませんね。

とはいえ、子供たちにそれは当てはまらないでしょう。ぞうのババール君は、半世紀の間、押しも押されぬ人気者として、子供たちの間で一番有名なぞうの名をほしいままにしているからです。アメリカのスヌーピーやミッキー・マウス、くまのプーさん、イギリスのパディントン、フィンランドのムーミン、オランダのニンフェ(ミッフィーあるいはうさこちゃんの名で知られています)、日本のぐりとぐら(最近だったらアンパンマンも)と世界にはさまざまな人気キャラクターがありますが、さしずめババールは人気キャラ・フランス代表というところでしょうか(おっと、フランスならタンタンもいるぞ!という声もあるかもしれませんが)。

ババールの生みの親はジャン・ド・ブリュノフ。1931年に書いた絵本『ぞうのババール・こどものころのおはなし』が人気を集めたため、その生涯にわたってババール・シリーズを書き続けました。その死後も息子のロラン氏が続編を書き続けています(このシリーズ自体については今月号の「ネタマ」をご参照ください)。

絵本やマンガは今だったらアニメ化されるのが人気の証ですが、ババールは音楽家からすばらしい贈り物を捧げられるという、ひと味違う榮譽に浴しました。前述の第1作『ぞうのババール・こどものころのおはなし』は、20世紀フランスの大作曲家フランシス・プーランクによって音楽化されたのです。「悪童と修道僧のふたつの顔を持つ」と評されたプーランクは、ウィットといたずら心に富んだ軽妙な作品や、カルメル派修道院の対話 人間の顔 といった超シリアスな傑作をものにしましたが、ババール にはそのどちらとも違う、「素」のプーランクがいます。こんなにも無防備なくらいデリケートなピアノの響きが、ほかのどんな曲で聴けるでしょうか…。プーランクをかくもみごとに武装解除させたのがババールの物語の優しくて大きな力であり、それを夢中になって読む子供たちの姿であったのは間違いありません。

### 水戸芸術館のババール

この絵本と音楽とを舞台の上で美しく結びつけることを思いついたのが、かつて水戸芸術館の主任学芸員を務められた室住素子さん(現在はオルガニストとして活躍中)。室住さんは、絵本から制作した400枚のスライドから160枚を選び出して舞台上のスクリーンに映し、ピアニストと語り手がババールの物語を紡ぐのと同時にスクリーン上では同時にババールの物語が進行してゆく、という絶妙なアイデアを思いついたのです。そこには、「こどもの日」に、お父さんお母さんと子供さんと共に楽しめる音楽会をプレゼントしたい、という思いがこめられていました。今、室住さんとカメラマンの田沢さんが制作したスライドをコンピュータのデータ化する作業を行っていますが、たいへんな手間と愛情のかかったスライドであることに感嘆しています。

この物語の「語り部」(文字通り物語を朗読する語り手と、音楽の語り手であるところのピアニスト)は2人。まず物語を朗読するのは長野羊奈子さん。かつてベルリン・ドイツ・オペラの正団員としても活躍した偉大な名歌手であり、その滋味あふれる語り口、千変万化の声色の変化はどんな子供の心もとらえてしまいます。そしてピアニストは高橋アキさん。現代を生きる作曲家たちにとってかけがえのない鍵盤上のミュージックである高橋さんは、ぞうのババール の一見シンプルな音楽からオーケストラ顔負けの色彩を引き出し、プーランクが生きていたら顔をほころばせること間違いなしでしょう。

この名コンビによる公演は1995年から97年にわたって3年間芸術館で行われ、いずれも満席のご好評をいただきました。そればかりか、全国各地のホールから「うちでもやってほしい」という熱烈なラヴ・コールをいただき、1999年に至るまで全国14箇所コンサートホールを行脚することになったのです。

最後の公演となった大分県立総合文化センター(水戸室内管弦楽団とミト・デラルコも公演を行っています)から5年。水戸芸術館での最後の公演からはや7年。7年といえば、ババール 公演で「子供」チケットの対象となる12歳のお子さんが、もう成人を目前とするまでに成長するほどの

時間です。3歳のお子さんと共に7年前のコンサートにいらっしゃったお母様には、もう2人目のお子さんが、ババールを楽しめる年頃になっていらっしゃるかもしれません。絵本の訳者である矢川澄子さんは、この間に逝去されました。長い長い不在のときを経て、企画者室住さんのハートを受け継ぎ、今、ババールが帰ってきます。

### 復活したババール

7年ぶりに復活するババールは、ピアノと語りはもちろんオリジナル・キャストの高橋アキさんと長野羊奈子さん。室住さんの選んだスライドにも手を加えることなく、オリジナルのまま上演します(スライド映写からコンピュータ操作によるプロジェクター映写に変換する、という方式の変化はありますが)。高橋アキさんがババールの前にサティの 子供の音楽集 新・子供の音楽集 からの抜粋をお話を交えて演奏するのも当時のスタイルのまま。「完全復元版」ババールを5月5日に実現するために、スタッフは一同奔走中です。

5月5日、ご家族で来ていただきたいのはもちろんのこと、昔ババールを芸術館で子供と見た親御さんが、大きくなったお子さんと共にふたたびご覧になれるというのもまた味わい深いことでしょう。もちろん、大人の方だけで来ていただくのだって大歓迎です。ババールの物語と音楽は、どんな世代の方でもこどもに返してしまう、不思議な力を持っているはずなのですから。

《矢澤》



## 最近の公演から

### MARCH



1



2



3



4



5



6



7

合唱セミナー2004 講師:松下耕  
(3月14日)

茨城県合唱連盟、茨城県高等学校教育研究会音楽部との共催により、毎年3月に実施している合唱セミナー。今年は前年に引き続き、松下耕氏を招き、合唱のためのたのしいエチュード1 同2を練習した。親しみやすい口調による楽しい話を交えた巧みな指導で、参加者は知らない間に合唱の奥義を体験してしまうという、松下氏ならではのセミナー。6時間という練習の時間があっという間に感じられた。今年は、昨年松下氏が即興で作曲した「水戸の歌」をバージョンアップしながらおさらいし、ミド(水戸)の3度音程とリズムの練習で開始。午前中は、昨年の復習もかねてエチュード1からの2曲を練習した。松下氏から「昼休みに少人数でカルテットやクインテットを組んで練習しておくように」との“宿題”が出され、午後はまずその成果の披露会が行われた。少人数で、とのことだったが、中学や高校の合唱部など、部活単位で発表したところが多かった。同じ曲を歌っても、グループによって、声や表情、雰囲気までまったく違うところが面白い。松下氏はそれぞれの発表が終わるごとに感想を述べながら、個性の大切さを訴え、点数主義のコンクール審査の難しさを嘆いていた。その後はエチュード2を練習。さまざまな旋法や日本固有の音階などにさりげなく触れつつ、参加者の笑みの絶えない講習が進められた。《関根》

アンケートから 松下先生はおもしろい。わかりやすかった。(日立市:N.K.さん) 松下耕さんのお話はとてもおもしろくて、しかもわかりやすいアドバイスをしてくれ、とてもよかったです。(那珂郡:M.T.さん)

クリスティーネ・シェーファー  
ソプラノ・リサイタル(3月21日)

「歌姫、水戸の春を彩る。」シリーズの第1弾、クリスティーネ・シェーファーのリサイタルが行われた。シェーファーといえば、世界各地の演奏会場やオペラハウス、さらには小澤征爾、アバド、ラトル、アーノンクールといった世界的指揮者たちからひっぱりだこのソプラノ歌手。しかし、水戸に現れたシェーファーは、そうしたトップ歌手ならではの華やかさよりも、ヴォルフ、ヴァーグナー、パーセルという水戸オリジナルの、ドイツ・リート中心の渋いプログラムに厳しく立ち向かう姿が印象的だった。ボニー、オッター、シュトゥッツマンといったリートの頂点に位置する女性歌手たちの多くが、外国人の立場でドイツ・リートを跳めるのに対し、生来ベルリンっ子であるシェーファーには自国の芸術に対する人一倍強い自負があったのではないかと思う。特にヴォルフには、シュヴァルトツコップやフィッシャー＝ディースカウといった偉大な先人たちの影響が強く感じられた。また、ドイツ・リートの表現の多層性という点で、ピアノのエリック・シュナイダーの果たした役割の大きさも明記しておく必要がある。アンコールは、1.パーセル ガイドーとエネアス よりベリンダのアリア、2.ヴォルフ 真夜中に、3.シューベ

ルト ミューズの子。《関根》

アンコールから この日、音楽は歌われたというより、音によって語られたような気がした。(中略)それにしても、昨年のオッターといい、シェーファーといい、特に心に残ったのが、共に戦いに出かける兵士への想いを歌った曲とは。曲の終わりの「allein!」、こんなに哀しくて痛ましい表現があったのだ。この先、ずっと忘れられないことだろう。(日立市:K.さん) CDのイメージでは、ガラスのような鋭角的でこわいような繊細な歌手というイメージでしたが、初めてシェーファーの生の声を聞いて、そのイメージは一掃されました。語り口も巧みで、豊かな声量、細かいニュアンスの表現など、すばらしいと思いました。できれば、ドイツ・リートの正統的な後継者になってほしいですね。(水戸市:S.E.さん) シェーファーの声、表現そして存在そのものが、私をどっぷりと集中させてくれました。久々に魂に響きました。クイーン・オブ・リサイタル! 一日中彼女の歌を聴いてみたいです。(土浦市:N.S.さん)

東京オペラグループ公演 奥様女中

(3月27日)

若杉 弘企画運営委員プロデュースによるベルゴレージの名作、奥様女中。オペラ・ブッファ史上に輝くこの傑作が芸術館で上演されたのは、なんとこれが初めて。その機会にふさわしく、公演に先立って行われた若杉 弘によるプレトークは、オペラの誕生からはじまってオペラ・セリアとブッファの違いまでをていねいに語る内容となり、大いに好評を得た。途中には、今回の主役二人である小鉄和弘と高橋薫子のデュエットでモーツァルトフィガロの結婚 冒頭の二重唱が歌われる、というリッチなおまけもついた(ピアノは山口佳代)。さてその二人が主役を務めた 奥様女中、さすが東京オペラグループの得意公演だけあって練達のひと言。イスとテーブルを花壇が取り囲むシンプルな舞台装置の上を駆け回る二人の縦横無尽。特にセルピーナを演ずる高橋薫子のコケットリーはウベルト小鉄和弘ならずとも筆絡されそうな魅力をふりまく。そして巨大な竹馬に乗って士官に化けたり客席に乱入したり大暴れのヴェスポーネ(実は演出家ヴィーゴ)に客席は沸きに沸く。この成功を受け、若杉企画運営委員は来年3月「ふたつの電話」と題し、ブーランク 声 とメモッティ 電話の名作2本を組み合わせた室内オペラ企画第2弾を計画中。乞うご期待!《矢澤》

アンケートから 若杉氏の話は、短時間ながらもわかりやすくてとてもよかったです(高萩市:A.E.さん)

初めてオペラを見ました。オペラというとなんだか近づきたいところがありますが、とてもわかりやすいプレトークと、すてきな演奏で満足できた(ひたちなか市:T.O.さん) 高橋さんがものすごく素敵でした(S.O.さん) ヴィーゴさんの演技は素晴らしいですね(東京都:I.K.さん) 演出がとってもステキでした。(中略)作品は古くても新しい感覚(日立市:K.T.さん) 会場全部を使っただけの演出のしく、すばらしかった(水戸市:G.T.さん)

1~2. 合唱セミナー2004

3~4. クリスティーネ・シェーファー ソプラノ・リサイタル

5~7. 東京オペラグループ公演 奥様女中



\* nettama= ネットワークする猫、タマ。  
芸術館のコンサートをサカナにいろん  
なところへnettamaします。

『ぞうのババール』シリーズ一気読み!

あるあさ たんとうのYがやってきて ぼくの  
めのまえに『ぞうのババール』の えほんを10さ  
つ おいていった。これをよんで ヴィーヴォの  
どくしゃのみなさんに しょうかいしてください  
というのだ。ねこである ぼくに ぞうのはなし  
をさせるとは しつれいせんばん とおこつて  
Yをひっかいてやったら Yはほうほうのていで  
にげ おまけに すってんとこころんだ まあ  
いつものことだ。それにしても やつは おっ  
ちょこちよい ババールのほんを わすれていっ  
た かえすのも めんどうだし おかげでぼく  
は ぜんぶよむことになった! でも おや お  
もしろいじゃないか?

おとつと、何たることだ、すっかりババール絵  
本の文体になってしまった。でもね、実際おもしろ  
いんですよ、ジャン・ド・ブリュノフの『ぞうのバ  
バール』シリーズ、大人が読んで、すぐれた絵本  
というのはそもそも大人が読んで十分にお  
もしろいもので『ぐりとぐら』シリーズとか『3匹  
のやぎのがらがらどん』といったクラシックは、今  
読んで絵も文もすばらしくて、ちっともあきない  
ものね。逆説的な言い方になるけど、子供を  
子供扱いせず、本気で対等の存在として語りかけ  
ている絵本こそ、子供にも大人にもおもしろい。

それにしてもババールのこのおもしろさには、  
またひと味違う部分もある。実はこのシリーズに  
は、「大人になって再読するとはじめてわかる」  
要素があって、それが僕を妙にひきつけるのだ。  
つまりババールというぞうのビルドゥングス・ロマ  
ン(成長物語)であると同時に、むしろ大人にな  
ってからの仕事 王となり 国家を、社会を、そし  
て家族をつくりあげてゆく にシリーズの焦点が  
しぼられているからだ。

というわけで、さっそくシリーズ全10冊の概略  
を紹介していこう。ストーリーを書いたからって、  
「読む楽しみを奪うな」なんて怒らないくださ  
いよ。ブリュノフの絵のちょっとよれっとした線の  
とぼけた味わい、いねいに描きこまれた背景、  
おはなしのおもしろさと矢川澄子さんの訳のす  
ばらしさは、ここで僕がかいつまんで物語を説明  
したところで、少しも目減りするものではないの

だから。以下、セリフは矢川澄子さんの訳を引用  
させていただいた。このシリーズはすべて評論社  
から発売中だ。

さて1冊目の『ぞうのババール』は今度コンサ  
ートホールで上演されるので省略。わるい狩獵者  
から逃げて街でおばあさんとくらし、やがて森に  
戻って王となるババールの物語は、セレストと結婚  
し新婚旅行に出発するというところで終わる。

『ババールのしんこんりょこう』はまさにここから  
始まる。気球に乗ったはいいものの嵐に巻き込  
まれ孤島に落ち、原住民に食べられそうになっ  
たり、鯨の背中に乗ったりサーカスに売られたり  
...と、全編の中でももっともアドベンチャー度  
が高い。しかも王が不在のぞうの国では、サイ  
(ピアニストではもちろんなく、動物のほうです)  
の国との戦争がおっぼじまってしまう。どうする、  
ババール?

『おうさまババール』2作目の大冒険と危機を乗  
り越え、ババール王はぞうの国を人間社会さな  
がらにビルドアップすることを決意する。着衣を  
奨励し、湖のほとりに王都を築き、ぞうたちは職  
業を持ってそれぞれの役割を果たすようになる。  
わくわくする話だ。僕が注目したいのは、社会に  
おける芸術家の役割がちゃんと描かれているこ  
と。「ふたりとも つかれたときは ドラモールの  
おんがくを きかせてもらう」といったセリフがあ  
るし、見開きで劇場のお芝居の情景がドーンと描  
かれ「でも ぞうたちが なにより よろこんだ  
のは たのしみのやかたの げきじょうの お  
しばいだ」とくるのがすばらしい。人間社会の醜  
さはこの理想の王都ではまったく存在しないが  
後半のアクシデントやババールの見る悪夢に、そ  
れがさりげなく象徴されているのもみごと。

『ババールのこどもたち』ババールとセレストの夫  
婦に、子供たちが生まれる!奥さんの出産を目前  
にしたババールのなんと落ち着かない気持ち  
の描写、なにも役立てるわけではない男として  
の無力感や苛立ち、生まれる子供への待ち遠し  
い期待...このあたり 作者の実体験ではないか  
と思うくらいリアルだ。めでたく子供が生まれ  
ても、おもちゃを飲み込んでしまったり、げか  
から落ちそうになったりとアクシデントの続出。子

育てのハードさをきちんと書いている。最後のバ  
バールのセリフが泣かせる。「こどもをそだてる  
のって たいへんなものだなあ」「でも ころう  
するだけのことはある。あのこたちのいないく  
らしなんて とても かんがえられないよ」  
『ババールとサンタクロース』ジャン・ド・ブリュノフ  
本人が書いたババールシリーズの最終作が 実に  
親バカな話なのはほほえましい。サンタクロース  
の存在にあこがれる子供たちの夢をかなえてや  
ろうと、王としての仕事を放り出してまでサンタ  
クロースを探しに出発するババール。セレストに  
言い残すセリフがいい味だ「それより るすの  
あいだ くにのこを よろしくたのむよ。そ  
れに ああいう かわったひとたち(註:サンタ  
クロースのこと)は あいてが おおぜいだと  
きをわるくするかもしれないし」。あんまり手が  
かりがないのに探しに出るババールも無謀だが  
奇跡のような僥倖が彼をサンタクロースのもと  
に導く。そして、お疲れ気味のサンタクロースが  
ぞうの国で休養をとらせてもらうという展開が  
実に秀逸だ。

実はジャン・ド・ブリュノフはこの第5作を最後  
に世を去り、その後を息子のロランが受け継ぐ。  
『ババールといいたずらアルチュール』『ババールと  
りのしまへ』『ババールのはくらんかい』『ババール  
とグリフアトキょうじゅ』『ババールのひっこし』  
の5作がそれだ。ジャンはもしかしたらババール  
の物語にさらに「年長者の死」とか「王位の継  
承」といった展開を与えたかったのではないかと  
も思うが、息子はむしろ父親の作り上げた理想  
郷の時間を永遠に凍結することに決めたかのよ  
うだ。絵本の中で実現されることのない王  
国のゆくえは、大人になった僕たちがさまざまに  
想像することにしよう。でも、アンチハッピー  
エンドは考えられないな。あの ババールたちが  
つくった ぞうのくにには ばかなにんげんた  
ちみたいなくしみや けんりよくよくや へ  
んけんは そんなにないのだから。



『ババールのしんこんりょこう』表紙

## プチ情報 速 達

音楽スタッフ、友の会事業に連続登場! 5月15日(土)の  
第14回LD鑑賞会では、おなじみ関根哲也のナビゲ  
ートでプロコフィエフ「3つのオレンジへの恋」(リヨン歌劇  
場の鮮やかなプロダクション)をお楽しみいただきます。  
今回ははいよいよDVDを使うそうですよ! また、5月30日  
(日)には新たな企画「プレ・レクチャー」の第1回として、

中村 晃が「ベリオの探し物 / ベリオからの贈り物」と題  
したトーク(CD等の鑑賞もあり)を行います。来る6月5  
日(土)の『ベリオの肖像』にむけてぜひお聴きいただき  
たい企画です。以上お問い合わせは水戸芸術館友の会  
事務局(029-227-8111)まで。

